

P. J. Cain and A. G. Hopkins, *British Imperialism: 1688-2015*,
3rd edition, Routledge, 2016, xxx+763pp.

竹内 真人

日本大学商学部准教授

ケインとホプキンスが『ジェントルマン資本主義の帝国』の初版でそれまでの産業を重視するイギリス帝国史を批判し、1688年の名誉革命以降三世紀間に及ぶジェントルマン・商業・金融サービス業の優位を強調してから、既に20年以上が経過した。その間、アンドリュー・ポーターとロナルド・ハイアムの厳しい批判はあったが¹⁾、本書の解釈を全否定する議論は少なく、その批判は「ジェントルマン資本家」の定義の曖昧性や、植民地ビジネスがロンドンのシティに限定されないといった部分的批判にとどまっている。すなわち、これまでの批判を振り返ると、ジェントルマン資本主義論を否定する議論よりも、むしろ部分的な修正を求める議論の方が一般的であったといえよう。

本稿で取り上げる第三版は、第二版と同様、一冊の合冊本となっており、そのテキストは改訂されていない。しかし、第二版で追加された「序文」(初版以降の論争の紹介)と「あとがき」(グローバリゼーション史)には大幅な加筆・修正が加えられ、その対象時期は2015年まで拡張されている。

ジェントルマン資本主義論については周知の事柄であり、第三版でテキストが改訂された訳でもないから、詳述することは控えておこう。むしろここで注目すべきなのは、第二版以降の研究動向を紹介した「序文」である。というのも、そこにはジェントルマン資本主義論の部分的修正を含む研究の新たな方向性が示されているからである。

第一は、イギリス帝国主義の性格 (character) 論である。これは最近ケインが発表した複数の論文²⁾に基づくものであり、「ジェントルマン資本家」の定義とも関係している。「序文」では、まずその厳密な定義が試みられる。それは軍人・専門職・イギリス国教会で高位を占めたジェントルマンの一部であり、軍事的奉仕のような義務や公務を遂行し、パブリック・スクールで磨き上げられた性格を発展させていくことが、イギリスの道徳的・物質的成功の鍵であり、文明化の使命の基礎でもあったと考えたエリート男性のことである³⁾。そこまではジェントルマン理念の連続性を強調した初版での定義と同義であるが、第三版の「序文」では、この定義が以下のように修正される。ジェントルマン資本主義の発展は初版よりもずっと「微妙 (nuanced)」であり、1800年頃に重要な転換点が存在した。それ以降のイギリス人が道徳的優位を回復し自由貿易主義を展開できたのは、福音主

義（Evangelicalism）が重要な役割を果たしていたからというのである⁴⁾。これはジェントルマン資本主義論の内容を修正する重要な指摘であり、最近の宣教史研究の蓄積を踏まえて、さらにジェントルマン資本主義論を発展させていくための新たな方向性を示したものと考えてよからう⁵⁾。

第二は、ブリティッシュ・ワールド論との接合の可能性である。最近のイギリス帝国史研究では、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどの自治植民地への関心が高く、「ブリティッシュ・ワールド」という文化的アイデンティティの枠組みの中でイギリス本国と自治植民地を捉え直す試みが行われている。つまり、イギリスからの移民によって建設され、イギリス本国と言語・文化・政治制度を共有する自治植民地に住む人々が、イギリスへの帰属意識を捨て去ることなく、イギリス本国及び他の自治植民地の人々とブリティッシュネスという感情的紐帯を共有したことを強調する研究が行われているのである。最近ではブリティッシュ・ワールド内の経済問題も考察され、ブリティッシュ・アイデンティティに基づくネットワークの下で文化的要因が本国・植民地間の経済関係にいかに関与したのか、またブリティッシュ・ワールド内の文化の共有がいかに関与したのかに経済活動の円滑化に貢献したのかが分析されている⁶⁾。またジェームズ・ベリッチは、ブリティッシュ・ワールド論から、アメリカを含むアングロ・ワールド論に分析対象を拡大しており⁷⁾、『ジェントルマン資本主義の帝国』の第三版では、かような「ブリティッシュ・ワールド論（アングロ・ワールド論）」が極めて高く評価されている。すなわち、最近の帝国とグローバリゼーションに関する研究によって文化的パースペクティブと経済的変化の関係が重要視され、「帝国経済」の絶え間ない再想像（re-imagining）こそが「帝国経済」の発展を理解する鍵であると認識されたのである。ケインズが『雇用、利子および貨幣の一般理論』の中で投資における「血気（animal spirits）」の役割を強調したように、19世紀末に自治植民地への投資額が高かった理由を理解するためには、当時のイギリス人がアメリカ合衆国と英連邦への投資を区別せず、同等なものとして認識していた点を理解する必要があると述べられている⁸⁾。

つまり『ジェントルマン資本主義の帝国』の第三版で主張された研究の新たな方向性とは、エドワード・サイドやベネディクト・アンダーソンが強調した文化と経済の関係、換言すればイギリス帝国の感情的紐帯と経済的紐帯の関係を重視するものなのである。今後は、ジェントルマン資本主義論と宣教史・ブリティッシュ・ワールド論を接合し、イギリス帝国における「感情的紐帯」、「経済的紐帯」、「軍事的紐帯」の複雑な関係のみならず、これら三つの紐帯が強められたり弱められたりした理由及びプロセスを解明していかなければならない。今後の課題にしたい。

注

- 1) A. N. Porter, “Gentlemanly Capitalism” and Empire: the British Experience since 1750?, *Journal of Imperial and Commonwealth History* (以下、*JICH*) 18: 3 (October 1990), pp. 265-295; Ronald Hyam, ‘The Myth of “Gentlemanly Capitalism”’, in Ronald Hyam, *Understanding the British Empire* (Cambridge, 2010), pp. 133-152.
- 2) P. J. Cain, ‘Empire and the Language of Character and Virtue in Later Victorian and Edwardian Britain’, *Modern Intellectual History* 4: 2 (August 2007), pp. 249-273; P. J. Cain, ‘Character, “Ordered Liberty”, and the Mission to Civilise: British Moral Justification of Empire, 1870-1914’, *JICH* 40: 4 (November 2012), pp. 557-578.
- 3) P. J. Cain and A. G. Hopkins, *British Imperialism 1688-2015* (3rd edn., Abingdon, Oxon, and New York, 2016), pp. 6-7, 9.
- 4) *Ibid.*, pp. 6-7, 11.
- 5) 竹内真人「宗教と帝国の関係史－福音主義と自由主義的帝国主義－」『社会経済史学』第80巻第4号、2015年2月、37-52頁は、そのような方向性を提示する試みであった。
- 6) Carl Bridge and Kent Fedorowich (eds.), *The British World: Diaspora, Culture and Identity* (London, 2003); John Darwin, *The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System, 1830-1970* (Cambridge, 2009); Gary B. Magee and Andrew S. Thompson, *Empire and Globalisation: Networks of People, Goods and Capital in the British World, c.1850-1914* (Cambridge, 2010); Andrew Dilley, *Finance, Politics, and Imperialism: Australia, Canada, and the City of London, c.1896-1914* (Basingstoke, 2012); *JICH* の「金融、帝国、ブリティッシュ・ワールド」特集号、第41巻第1号、2013年2月。
- 7) James Belich, *Replenishing the Earth: The Settler Revolution and the Rise of the Anglo-world, 1783-1939* (Oxford, 2009).
- 8) Cain and Hopkins, *British Imperialism 1688-2015*, pp. 2-3, 14-16, 19; Peter Cain, ‘Afterword: The Economics of the “British World”’, *JICH* 41: 1 (February 2013), pp. 98-103.